

会 議 録

□全部記録 ■要点記録

1 会議名	令和5年度第1回姫路市立総合教育センター運営協議会
2 開催日時	令和 5年 7月11日(火曜日) 14時30分～16時30分
3 開催場所	総合教育センター 3階 講義室
4 出席者又は欠席者名	(出席者) 加治佐委員、井上委員、三木(明)委員、溝口委員、 山元委員、三木(崇)委員、中井委員、山下委員、 上田委員、東郷委員、中川委員 (事務局) 総合教育センター 太田所長兼育成支援課長、八木副所長 教育研修課 西川課長、古林係長、佐藤課長補佐 育成支援課 古田係長、南原係長
5 傍聴の可否及び傍聴人数	傍聴可、傍聴人1人
6 議題又は案件及び結論等	1 令和4年度事業の取組状況について 2 令和5年度事業について
7 会議の全部内容又は進行記録	別紙参照

開会

総合教育センター所長挨拶

委員紹介、定足数報告

「姫路市立総合教育センターの概要」について説明

「令和4年度事業の取組状況」について説明

委員：18ページの支援実施の状況の表で、対人関係の問題が68件、問題行動40件と以前よりも増えているようですが、これはどのような内容なのか教えていただきたい。

事務局：令和3年度はコロナのために友達と活動することが少なかったために相談件数が0件だったのが、令和4年度になって友人と接する機会が増え、こういう結果になったのではないかと考えています。

委員：いじめとかそういう問題なのか、どういう質の問題なのかもう少し具体的にわかればと思ったことと、もう1点気になったのは教育の面です。21ページの健全育成活動の推進で、薬物乱用とかネットトラブル対策にすごく力を入れられて、人数も増えて成果を上げられていると思いますが、このネット社会の中で今、性の問題、性暴力とか性アイデンティティとかの問題が入っていない理由があるのか、あるいは入れられないのか、などが気になりました。

事務局：性の、というのは、LGBTとかではない性被害の問題ということですか。

委員：そうです。ネット問題の裏側で性暴力の問題、今子供たちが非常に危険な状況に置かれている気がしていて、そのあたりはどうなのだろうか。ここが、薬物乱用とネットトラブルというだけになっていて、そのトラブルの中身はどういう問題が取り上げられているのかが気になりました。特に子供たちの状況、性暴力とか性の問題は、ネットを使うことでかなり危険性が増していると思いますので、このあたりの教育はされているのでしょうか。

事務局：ネットトラブルについては、ネットの向こう、相手が見えないということも含め、性的なことや金銭に関わること、ネットを通じての誹謗中傷等、多岐にわたり、ネットトラブル講座を行っています。また学校とも、この辺を重点的にというような配分等についても相談をしながら、もちろん今言われているような性的なことについても、内容の中に盛り込んで実施しています。

委員：対人関係のところの件数が増えていましたので、そういうことも含めて、子供たちの、自分を大切にするとか、性の問題とかいうところにも近づいていただければと思いました。

会長：11ページ、姫路きょういくメッセを令和2年度からオンラインで開催していて今後も続けるということですが、参加者は増えているのですか。

事務局：姫路きょういくメッセについては9ページにデータを載せていますが、ビデオや動画の再生回数が1085回ということで、それ以上の人が参加されているかもしれませんが、例年と変わらないぐらいかなと思っています。

会長：満足度が上がっているということですね。

次の12ページ、ICT機器の活用について、が指標になっているわけですが、難しいところですね。高いレベルになってきて、ちょっと足踏みということだろうと思いますが、ICT機器を活

用した授業や学びの支援について肯定的な回答という上の指標は、小学校はかろうじて目標達成ですが、中学校はそうではないですね。小学校もパソコンを使って学ぶことが好きですかというのが、目標値にちょっと届かなかったということですね。その分析が13ページにあります、なかなか分析が難しいところですね。一言で言うと、1人1台になってもう3年たって、より高いものを要求するようになってきているから、満足度が十分に上がらないということですね。それはわかりますが、子供の意見、例えば自由記述があるとか、あるいは先生方がそういうことと言われるとか、何か根拠みたいなものがあるのですか。

事務局：教員はほぼ、ICT機器を使った指導はできると思います。できるけれど、自分の教科の今日の勉強にはICT機器は使わない方がいいという判断をして使わない。ICT支援員が各学校に定期訪問しており、たくさんの先生がいろんな形で使われるようになったという報告を受けています。ただし、教科の特性によって使わない方がいいと判断されて使わない人がいるのではないかなということで、その分析をしました。

会 長：教職員や児童生徒からの回答というのは、今はもう紙ベースじゃなくて、1人1台の端末を通じての回答になりますね。だから非常に利便性が高くなっていると思いますが、そのときに原因を探るような、場合によっては自由記述でもいいと思いますが、そういう質問はしていないのですか。

事務局：前からこの指標でやっている関係で、そこまでは今のところはできてなくて、今年も検討課題として残っていくかなと考えています。

会 長：そうですね。ただ、もうそういうことをしっかり把握して対応を打つというある意味高いレベルに来ているのかもしれないですね。だからぜひそこを、正確につかむ必要があるのではないかなと思うのです。指導のツールとしてだけではなくて、こういう場合の原因分析や、対策を立てる際の根拠を得るためにも1人1台を活用する。データを収集しやすいですから。それを分析、教育データサイエンスと言っていますが、そういうことが必要な段階なのかなという気はします。なかなか、言うのは簡単でやるのは難しいのですけど。

事務局：教職員向けに別のアンケートのような形でできますので、そんな形でも何かやっていけないかなと思います。

事務局：先ほどの対人関係のところですが、内容は、友人関係とか、親子関係、この辺りの悩みで、いじめは、その他に含まれています。この主訴別の中にいじめの件数がないのは、いじめというのは非常に相談が少ないからです。学校で、定期的にいじめがあるかないかを面談等を通じて調査しているので、ここに相談に来るまでに学校で対応できている部分が多く、相談に至ったのは、令和4年度で9件でした。それも学校で解決したという形になっています。

委 員：PTAの広報誌で、不登校について取り上げようかと考えているのですが、相談数で、不登校3497件というのは、どういった内容が多いのですか。学校の勉強が、だんだん、中学校になると難しくなってきた、ついていけないから家にいるという話を聞いたことがあるのですが。

事務局：相談はほとんどが保護者からで、内容は、今言われるように、学校での学業のこともありますが、それが本当の主な原因かということ、不登校の場合はもっともっと根深い部分があるかなと思います。対人のこと、勉強のこと、いろんなことを含めて、本人もなぜ学校に行けないのかわからないけれども、どうしてと周囲に聞かれたり自問自答をしたりする中、勉強がわ

からないからという言葉が出てくることが多いのかもしれませんが、様々なケースがあると思います。集団の中で自分の居場所を見つけにくいということもあるかもしれませんが、不登校の原因は本当に様々だと思っています。

会長：全国的な傾向だと言われていますが、17ページの1番上、小学校中学校の特別支援学級の学級数と在籍者数ですが、この1年間でもものすごく増えていますね。これ、単年度でこれだけ増えるのはすごいと思うのですが。これまでも増えてきたと思うのですが、この割合じゃないですよ。この割合で増えてきたらすごいことになると思うのですが。この単年度でこんなに増えた理由は何でしょう。学級づくり、学級編制は県の管轄ですか。

事務局：特別支援学級の編成については、県が決定権を持っています。それぞれの学校の子供たちがどう個別最適な学びをしていくのかということについては、市が進めていくのですが。特別支援学級の学級数は、令和元年度が233、令和2年度が231、令和3年度が236、令和4年度が251、令和5年度が272で、4年から5年も増えています、毎年増えてきています。

事務局：資料17ページの数値に誤りがありました。令和4年度としている数値は令和5年度のもので、令和4年度は、小学校の在籍者数が782人で学級数が180学級、中学校の在籍者数277人、学級数71人、総数で在籍者数1059人、学級数251学級です。お詫びして訂正いたします。

毎年増加している要因としては、早期からの就学相談体制について保護者の理解が進んできていることです。早くから診断が下りたり、発達に課題があったりして、お子さんに応じた学級や特別支援学校など学びの場を検討されることが増えてきました。また、保育所や幼稚園の先生にも理解が進み、親御さんと話をしていく機会が多いように思います。

会長：新しく特別支援学級ができますと担任が1人配置されますね。これだけ急激に増えると、ちょっと教師不足の原因かもしれないですね。

「令和5年度事業について」説明

事務局：今年度の取り組みに合わせ、先ほど会長が言われた特別支援学級の学級数増加のことについて補足します。文部科学省から出ている資料では、特別支援学級に在籍する児童の数が、10年前と比べ、全国的に見て2.1倍に増えています。全体の割合では、1.6%から3.7%まで増えているのですが、これも、個別最適な学び、子供たちにとってどういう就学の場が必要なのかということを丁寧に考え、全国で特別支援教育を大事にしていた結果、学級数が増えてきたのではないかと思います。

委員：少年補導委員は、今、333名が活動をしています。そして、兵庫県補導委員連合会、西播磨の4市4町の補導センターと連携して、健全育成の情報交換をしています。各地区によりいろいろな問題行動があるわけですが、共通点は、不登校の問題です。それからSNSのトラブル。それから、子供たちの非行、問題行動が、非常に低年齢化してきていること。これは前回も述べましたが、ますます増加してきているという現状です。特に小学2年生3年生、時に1年生に至るまでこういう問題行動があるということです。

そういう中で最近万引き防止会議を開き、関係機関や量販店の方々と話をしました。高齢者

の万引きというのは変わっていないのですが、非常に小さな子供たちの万引きがあり、これは非常に憂慮すべき事態であるということを発表されてきました。一番問題になってきているのは、いろいろ子供たちの環境が変わってきて、その中で2年生、3年生の子が、自分がいじめられたら困ると、存在をアピールするために、自分の小遣い以外に、親のお金をちょっと失敬して、お菓子を買ってきてその友達に渡す。あるべきではないのですが、お金が入らないといずれ万引きに発展していこうというような、こういう問題行動ですね。

それと、最近はいくつかの新聞等載っているように、親の養育力の低下が非常に問題になってきているのではないかと。生徒指導の先生方も、家庭を訪問して親と面談しても、親がこちらを向いてくれないということで非常に悩みがあるとされていました。

我々補導委員としては、従来は問題行動というのは大体目に見える行動で、街頭補導をして、ちょっと行き過ぎた行動を注意しています。それが、不登校とかSNSのトラブルとかになってくると目に見えない問題です。非常に根の深い問題で、一朝一夕には解決できない。これは地域もさることながら、我々関係者、教育者、それから特に家庭が大事です。不登校は、原因がわからない。いろいろな研修を受けますが、これといった特効薬は、ないようです。

西播磨の補導委員会でも問題になるのは、将来この子供たちが成人になったらどうなるのか。我々は、子供たちにバトンタッチするためにいろいろな面で活動していますが、非常に危惧しています。一朝一夕に解決できる問題ではありませんが、ひとつでも解決策を見つけ、いわゆる健全育成のために向かっていきたいと考えています。

委員：こども家庭センターも、子供、あるいは家庭の相談ということでいろんな相談を受けています。相談件数は、これまでずっと増えてきていましたが、少し減った。ただ虐待の相談件数は、今までものすごく増えてきて、3年度が1182件あったところが、令和4年度では1160件ということで、微減はしましたが高止まりという状況にあります。我々のところは中播磨と西播磨という広い範囲でやっているのですが、その中でも姫路市は、1160件のうちの849件で、7割を占めています。今日紹介いただいた施策等も、特に障害の関係とかいろいろ関わりも連携もありますので、引き続き皆さんとも連携していけたらと思っています。

委員：東京の児童精神科で働いていましたが、去年、帰ってまいりました。東京時代は、教育に興味があったので、区の教育委員会の仕事とか教員研修をしていました。直接子供の生活に介入できる職業は親を除くと教員しかないと思っているので、教育のインパクトの大きさはすごく大事だと思っています。その教育を支援できればという思いで仕事をしています。臨床実感としては、帰ってきて非行が多いとか、東京時代に比べると家庭背景が悪い子や、理解が悪い子供、親はかなり多いという実感を持っています。その子供たちが何でそれが良くないかわからずに、危ない方法だけ手にやってしまっているというところがあると思いますので、支援する大人を通じてそういうものから距離を取っていくという教育は必要だということをひしひしと感じています。そういう意味では、今日の資料で、例えば先生方に薬物とかネットトラブルというのはもちろん知っておいてほしいのですが、どうやってそれを子供に伝えるかという部分や、あるいは早期発見できるかというところがあるといいと思いました。

委員：教育研修課についてですが、幼稚園では今年度園内研修を1から動いていこうという話を

しています。主任教諭の研修会におきましても、園内研修について1年間をかけて、4回ぐらいの会を計画し、講師として研修課の指導主事の先生にお願いしています。保育力を上げていくということと業務改善ということ、難しいところですが、どちらも大事にしていきたいので、そのあたりを踏まえて助言いただけたらありがたいと思っています。園外研修は、研修を選択できるという、この年齢になったらこれというものではない選択研修があり、それぞれ問題意識を持って参加できるので、大変いいと思っています。主催する側としては大変かと思いますが、続けていってほしいと思っています。

育成支援課については、幼稚園でも園児数は減っても支援を必要とする子供の割合は高くなっています。就学前相談で、5歳児については、親から申請に基づいて、連携支援、教育支援に繋げて指導助言をいただいています。3、4歳児については、教育相談で、助言をいただいています。幼稚園で一番困っているのは、3、4歳児で家庭から入ってきた子供は、保護者がまだ特性について受け入れていなくて、連携支援、専門機関に繋がっていないことが本当にたくさんあり、どう繋げていくかが一番難しいところです。1年間をかけて、そういう機関と繋げていくことが多くあります。園だけでは難しい場合もあり、支援課の、地区担当の指導主事をお願いしながら、専門機関と繋ぐというあたりを、円滑に進めていきたいと思っています。

事務局：園内研修の主任研修に当課の指導主事をいうことで依頼いただきました。園の先生方が前向きに研修されることに、できる限り協力したいと思っています。園外研修の選択研修は、今年、ご存知のように初めて全部オンラインでやりました。このメリットは、園の中で複数で研修できますので、ひとりでも多く研修を進めていただけたらと思います。

事務局：特別支援関係の教育相談も、担当指導主事が幼稚園の先生方と相談しながらということですが、やはり関係機関に繋がっていただくしかないと思います。ルネス花北や、「みらいえ」という、就学前の子供たちの困り感をどうするかということに力を入れていこうとしているところとも連携していきたいと思っています。本当に大変だと思いますので、一緒をお願いします。

委員：教職員の資質向上の推進については、研修課の方でスペシャリスト派遣事業等、講師派遣について、日頃から支援いただいております。教職員の本当の意味での資質向上ということになりますと、なかなか士気が高まらない職員も抱えているのが学校の実態です。研修に参加はしても、なかなかそれが自分のものにならず、学校で日々の学級経営、日々の指導に困っている職員もいるのが現状です。1人1台の端末についても、子供たちも楽しく使い始め、教師も、ある程度までは使わせながら授業を進めることができています。ただ、敬遠する教師も出始め、それにつれて子供たちの興味も下がっていく。タブレットを使っただけのドリル学習等は子供たちは喜んでするのですが、なかなか授業に反映できない。質の向上を、学校も努力していきますので、何らかの手立てをしていただけたらと思っています。

育成支援課では、プール介助員、支援員等の派遣についていろいろお骨折りをいただいて本当にありがとうございます。医療的ケアの子供さんの導尿について看護師を派遣していただいて保護者の負担が大変減り、保護者が喜んでます。今後とも、よろしくをお願いします。

事務局：教職員の資質向上に向けていろいろな研修をしています。特に夏休みには、教科に特化した研修もたくさんありますので、教職員にできる限り研修を受けに行ったらと指導してもらえればと思います。今までの、当課がめあてを指定してそのめあてに向けて研修してもらうスタイルから、今年は、自分で研修のめあてを設定した上で研修を受けてもらうという、より主体

的な研修になる方向に変えていますので、その辺りも踏まえて、校長先生から職員に助言いただけたらと思っています。

タブレットを使った学習についてですが、今、みんなが使えるようになったけどさらにどう使っていくかというステージに移っていると思います。たくさんアイデアをICT支援員が持っていますし、当課からも情報提供をしていますので、それらをうまくキャッチして、夏休みの支援員の研修等に活かしていただけたらと思います。どんどん相談していただけたらと思いますので、今後ともよろしくお願いします。

事務局：先日、医療的ケアシステムの推進会議を開きましたが、やはり一番心配することは、事故がないように、本当に命を預かることですので、安心していただくことが大事と思っています。そのためにも、学校と保護者、訪問看護ステーションとの信頼関係も大切になってくると思います。そういう意味で学校の方にもいろいろと中に入っていただき、大変なところもあると思いますが、引き続きよろしくお願いします。

委員：中学校は、やはり教科制で、教科で今までやっていた授業形態が一番いいと思っている先生もいますので、ICTを使ってもっと効率よく授業ができたり、子供たちの学びを集めたり分析したりというところを研修で学んでもらったらと思っています。ICTに関しては、ICTミニ講座が定期的に行われて、ICTは得意じゃないという先生が気楽に参加できているので、この講座はすごく有効だと思っています。

教員のことは、若い教員がすごく増えて、ベテランの先生と比較されたり、自分はどうか悩んでいる場合もあるのですが、誰でも安心して授業ができたり担任ができたりする体制を作っていく必要があると思います。学年で何か取り組むとか、教科全員で対応するという研修を深めています。教科部会で授業研究をしたり、学年を超えて授業参観をしたりして進めています。また、先生が足りない状況で、チーム担任制というか、先生が抜けたところを学年で補えるような体制についても話し合いをしています。先生が足りていない状況は本校でも課題になっています。

特別支援学級の生徒が増えると同時に、通常学級にも発達に課題のある児童生徒が増えてきていると思っています。ただ、学年が上がるごとに課題が変わり、特別な支援がいる子がちょっと減る反面、不登校傾向の子供は、中学校でぐっと増えている状況です。特別支援教育の支援員が小学校にも中学校にも配置されたり、昨年からは医療的ケアの看護師の巡回が始まったりして、すごく助かっています。教職員の不安、負担が緩和されていると思います。ただ、支援員や、不登校指導に専門で当たるような人材の確保が課題になっています。だからといって、誰でもいいので人を配置してくださいというわけではなく、教職員と協力して子供に寄り添ってくれる人となると、資質も一定の質を確保しないといけないということも課題になっていますので、その点に関してもまた学校と協力して、人材の確保をお願いしたいと考えています。

事務局：研修のことですが、ICTミニ講座、毎月開いていますが、ご参加ありがとうございます。先ほども言いましたが、ICT支援員が月に1回もしくは2回学校に出向いています。その支援員にこんな研修をとオーダーすれば、準備をして行きますので、上手に使っていただけたらと思います。教科のやり方に固執してなかなか広まらないということについては、今年、ICT研修で教科担当者会と連携して、各教科でどんな使い方ができるかということを研修した上で、広

めていこうという試みをしています。それがうまくいって、少しでも教科の中でICTを使う先生が増えたらと思っています。

事務局：通常学級に在籍する子供の中に学習面とか行動面で課題というか苦しさを持っている子供が増えているということですが、ご存知のように、文科省が言っているのは、推計値ですが約8.8%学級にいるということで、10年前と比べるとそういう子供たちを対象にした通級指導も約2.5倍に増えています。兵庫県も、通級指導を増やしていくという方針を出しているので、私達も一緒に整備を進めながら、子供たちが個別最適な学びができたり、教室、学級に戻って、皆と一緒に勉強ができたりして、困り感がちょっとでも減るようにと考えていますので、学校と協力をしながら進めていきたいと思っています。

人の話も、本当に、学校園がマンパワーが大切なのもよくわかっています。できるだけいい人材を確保できるように努めながら、子供たちにとっていい教育ができるようにと思っています。人の配置ということについては、県と市の壁があり、やはり県から配置してもらうことが多いので、県に要望していくことが主になりますが、その中で、姫路市でできることについては、できる範囲で頑張っていきたいと思っています。

委員：ICTに関しては、機器並びにネットワークの整備をしていただき、またICT支援員に頻繁に来ていただくので、先生方が当たり前に見えるような状況が市立高校にはあります。学校の実感としては助かっています。今は、授業の質を上げるためにどういうコンテンツをどのように使うのかということにちょっと苦しんでいます。そのひとつの背景として大学入試があります。推薦入試が大学入学生の半分に、入試の形態が大きく変わっています。それに対応できるような研修も今後設定をしていただければと思います。

また子供の社会がまさしく大人の社会と同じような縮図になっていて、特別支援関係も経済的な面もコロナの関係もあつてますます増え、それが子供の教育の実態に反映しています。おっしゃられたように、パーセンテージもまさしく8.8%、まさにそのとおりだと思います。その実態をできるだけ早く保護者、本人の理解のもとと吸い上げて、いかに個別に対応できるのかということも含めて、今後とも助言をお願いします。

事務局：教職員の質を上げるための研修は、本当に今年重点的に取り組んでいます。いろいろな形で情報発信をしていますが、それがなかなか先生方にまで伝わっていないというのが課題かなと思いますので、その辺りも含めて、今後、重点的に取り組んでいきたいと思っています。

委員：特別支援学校は医療的ケアシステムの構築や介護タクシーのような、子供たちの基礎的な環境整備を、委員会で高めていただきました。次にある合理的配慮という部分は、私はそれを動かす人だと思います。今は医療と教育がどのように関係していくか、どのように重なる部分をするかということを考えながら、看護師さんたちと我々教員とが動くことができています。そうすることで様々なことが解決したり、見通しが立ったりしてきました。一方問題点も同時に見つかっているというような状況です。併せて学校にいる生徒は、重度な子供から軽度な子供まで、幅広くなってきています。医療的ケアの必要なお子さんから高校・大学入試を目指すお子さんまで在籍している肢体不自由特別支援学校です。非常に学校の経営が難しくなっている現状です。それに対しても教育研修課や育成支援課の指導主事の方に学校運営の基礎を支えていただけて本当にありがとうございます。

私は、障害の軽減を目的としてICTを使うのではなく、障害のある子供たちがいかにこれから先、充実できるかというところにICTを持っていきたいと考えています。そのために本校では農政総務課と一緒に実践に取り組んだり、分身ロボットを使っての修学旅行を実現したりしました。本年度も継続しながら、子供たちが自立していくためにどうするかということに対して、ICTがいかに有効かということ、肢体不自由児の子たちですから、特に使えるものは使っていきたいと考えています。

会長：やはりひとつは子供たちを取り巻く環境が変わってきていて、そういう影響が大きくなってきているということですね。それから学校の中でも、GIGAスクール構想による1人1台が3年ぐらい経って、次の課題になってきているということだと思いますね。なかなか難しいかもしれませんがやはりエビデンスに基づいた対策を打つことが重要だと思います。

閉会